
D.T.

華燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・T.

【Nコード】

N0653F

【作者名】

華燐

【あらすじ】

放火事件により両親と妹を失った双子の兄弟、要と縁。家族を助ける事を優先しないで、逃げた事から、自分の無力さを知った2人は犯人を捕まえる事を決意した。しかし、天候も悪く、目撃者もない為、捜査は難航し続ける。そんな中、要はとある掲示板で犯人を見つける手がかりを掴んだ。

FILE..ZERO

———何だよ！

どうして、どうして俺はこんなにも無力
なんだよ！

もっと、もっと

出来る人間として生まれたかった・・・

『——・・・県で今朝放火事件が発生しました。死亡者は3名、軽傷者は2名です。犯人は現在も逃走中と思われます。それでは、

現場の関野リポーターに代わります。』

そこでニュースは、俺達の住んでいた家を映し出した。
家は、真っ黒で1階はほぼ全壊。2階なんて床板さえも残っていない。
い。

家の前にいた、関野せきのとかいうリポーターが喋り始めた。

『ここが、今朝放火があった家です。ここは、あたり一面薄い霧で覆われており、見渡しが悪いですね。』

『死亡したのは、この家庭の父、久志ひさしさん(42)、母、紀恵のりえさん(40)、長女、香織かおりちゃん(7)の3名です。軽傷者の2人は、長男、要かなめくん(15)、次男、縁よすがくん(15)です。』

そう言って父さんと母さん、そして香織の写真が映った。
まだ、最後にあってから5時間も経っていないというのに、何故か俺は懐かしかった。

『日比野アナ、要くんと縁くんは何故軽傷で済んだのでしょうか？』

『駆けつけた消防隊によると、2人は両親が先に行くよう言ったので、外に逃げたらしいです。その後、2人が最寄の公衆電話から消防隊を呼びましたが、両親は香織ちゃんを助けに行ったきり、還らぬ人となったそうです。』

そして、また別の報道が始まった。

所詮、俺達にとって大惨事だった事も他人にとっては5、6分で片付く物事なのだろう。

学校や会社に向かう頃にはきっと忘れてしまう、そんな事なのだろう。

「・・・ねえ、要！要ったら！」

「な、何？」

「父さんたちが・・・その死んだのは悲しいけど、さ。俺たちは進まなきゃいけないんだよ？」

なんで慰められてんだよ、と思ったが、縁は優しいから俺が父さん達が死んだ事を悲しんでいるんだと思っただけ。

悲しくないと言ったら嘘だけど、実際まだそんなに実感が湧かない。

「なあ、縁？お前、父さん達の顔、思い出せるか？」

縁は、一瞬目を見開いたが、静かに目を瞑った。

「・・・思い、出せるよ。香織がさ、満面の笑顔で勿忘草ワスレナグサに水やっ
てるんだ。父さんは、相変わらぬの仏頂面で新聞読んでるんだよ。
母さんは、要を怒鳴り散らして起こしてるんだ。」

そういえば、そうだ。

いつも俺は母さんに無理矢理起こされて、香織のちっこい手を引いて縁と3人で仲良く小学校に向かうんだ。

そして校門で、春日兄かすが、行ってきまーす！って香織が言うんだった。

「要お兄ちゃん、かな兄で、縁お兄ちゃんが、すが兄だから、2人一緒に呼ぶ時は春日兄だね！」

香織がまだ3歳の時に、意気揚々と宣言されて、俺たちは顔を見合

わせて苦笑したんだっけ。

「懐かしい、な。そういえば、お前っていつもこんなに早く起きんの？」

そう聞いただけなのに、何故か縁は俺を不思議そうに聞いてきた。

「要、もしかして熱ある？それとも、悲しすぎて頭がどうかになった？」

「馬鹿か、何言ってるんだよ。俺が病気だった事が一度だってあるか？」

俺が偉そうに言うと、縁はぼそりと言った。

「何とかは風邪を引かないって言うしね。」

「どの口がそんな事言うんだろうなー！」

俺は縁の頬を抓ってじやれていると、40後半にしか見えないおっさんが部屋に入ってきた。

FILE: ONE

「やあ、こんにちは。」

おっさんが手を差し出してきた。
俺たちはとりあえず挨拶をして、早速本題に入った。

「おっさん誰？」

縁が慌よすがてて俺の口を塞ふさごうとしたが、間に合うはずもなく、顔が真っ青だ。
もしかして、縁はこのおっさんの事知ってるのか？

「おっさんはないだろう、要かなめくん。俺はまだ39なんだからな。」

自信満々に言っているが、39歳ってもうすぐ40になるんだから大して変わらないだろう。
だけど、馴れ馴れしく俺に話し掛けてくるおっさんに俺は少し嫌悪感を抱いた。

「じゃあ、おじさん。おじさんは誰なんですか？俺の知ってる人じゃないですよね？」

ここまでくると、縁は世界の終わりとでも言うかのような顔になっていた。

だから、このおっさんがどうかしたのかよ？

確かに、おっさんもおじさんも意味合い的にほとんど変わりはない、がおにいさんというには聊^{イササ}か無理がある。

おっさんは苦笑しつつも、俺の質問に答えた。

「ああ、君は知らないだろうね。縁くんには先に自己紹介しておいたんだけど、聞いてなかった？」

「縁、お前このおっさん・・・あ、おじさんのこと知ってんの？」

縁は、気まずそうにしながら口を開いた。

「要が感傷に浸ってる間に、一度部屋に来たんだよ。その時に挨拶してただけど、要が放心状態だったから後でまた来るって言うってたんだよ。」

「なら言ってくれれば良かったのに。」

「だって要、俺の話全然聞いてなかっただろ！」

そういえば、そうだったな。
縁が俺を呼んでたんだって、しばらくして気付いたんだった。

「あ、悪い悪い。忘れてた。」

「忘れてた、じゃないよ。全く……。」

「あのさ、兄弟喧嘩に口はさむつもりはないけど、そろそろ本題に入っているかな？」

おっさんが、多少遠慮気味に聞いてきた。
そうだ、おっさんが一体誰なのか聞いているんだった。

「で、縁。このおじさん誰？」

「この人は、この放火事件を担当してくれてる刑事さんで、俺たちは事件解決への捜査協力をする事になったんだよ。」

「へえ・・・このおじさんが？本当に捕まえれんの？胡散臭いんだけど。それにさ、俺たちがなんでわざわざおじさんの為に、協力してやんなきゃならないわけ？」

縁が慌てておっさんに謝る。

「すみません、要・・・兄さん、口がちよつと・・・いやかなり悪いんで。」

「気にしないでいいよ、まあこんな老いぼれサラリーマンみたいな格好してる俺が悪いんだし、気にしないでいいよ。」

そう縁に言うと、おっさんはこっちを向いた。

なんだよ、俺に文句でもあるのかよ、こいつも学校の教師達と大差ない、そう思った。

「一応刑事してます、東條 焰とつじょう ほむらです。まあ、こんな格好だから期待できないかもしれないけど、とりあえず全力で捜査解決させるつもりだから。」

あれ・・・？叱らないのか？

ああ、なるほど。

このおっさんは、本気でこの事件を解決するつもりなんだ。

その為なら、どんなに蔑まれたって構わない、強い覚悟を持ってるんだ。

「焰、か。至極立派な名前だな。事件と運命を共にする覚悟は、紛れもない燃え立つ激情。」

俺が、そう言うとおっさん、焰は一瞬驚いていたが、すぐに気だるげな表情になり、俺に笑いかけた。

「よくわかってるじゃねえか、要。俺に協力してくれるか？」

「ああ、いいよ。少しの間、アンタと運命を共にするのも悪くはない。なあ、縁？」

「うん！俺と、要と、刑事さん、皆で犯人、見つけよう！」

「縁に俺、・・・刑事さんってなんだよ。そんな他人行儀になんなくてもいいだろ。俺らはもう、仲間なんだから。」

俺が笑ってそう言うのと、焰が付け加えるように言った。

「要は、もう少し遠慮してもんを学んだ方がいいんじゃないか？まあ、縁。俺の事は焰って呼んでくれよ。刑事さんなんて、堅苦しい

だろ？」

こうして、俺たちの放火犯捜査は始まった。

これからどんな試練が待ち受けるかわからない。

でも、俺たちは進むしかない。

時は、俺たちを待ってくれないんだから。

FILE: ONE (後書き)

誤字・脱字等があれば御報告していただけると幸いです。

FILE::TWO

とりあえず、これからどうやって犯人の目星を立てるか話し合い始めた俺たちだが、未だにこれといった手掛かりもなく、後先真っ暗といった感じだ。

「犯人は現場に痕跡を一切残していない。それに現場は見渡しが悪くって目撃者さえいない状態。どうやって捜し始める？」

縁が俺たち^{よすが}に聞いてくる。

つまりは、犯人の人物像が一つもわかっていない今、どうやって情報を集めるかって事だろ？

「手当たり次第にやってみる、とかは？」

俺が提案すると、2人は溜め息をついた。

まるで、俺一人だけ捜査の伊呂波^{イロハ}がわかってないみたいじゃないか。

「な、なんだよ。俺の案、そんなに悪かったか？」

「うん、ものすつごく悪かった。だから聞かなかった事にするよ。」

さらりと縁が酷い事を言ってくる。

なんだよ、そこまで言わなくってもいいじゃないか。

「あのさあ、犯人の手掛かりが俺たちには一切ないんだよ？そこん
とこ、わかってるよね？」

縁は、子供に何かを諭す時のように、俺に念を押してくる。

「んなこと、わかってるよ。」

ぶつきらぼうに俺が返事をする、2人は更に重い溜め息をついた。
縁は、呆れて頭を抱えているし、焰ほむらなんて一見苦笑しているように
見えるが、呆れを隠せないでいる。

なんだよ、2人とも。

俺だけ話についていけないみたいじゃないか。

「じゃあさ、これからどうすんの？手掛かりもないのに、此処でじっとしているなんて、俺は嫌だよ。」

「それを今考えてるんだけど・・・？」

縁も焰も、完全にあきれ果てている。

「いいよ、もう。俺一人で捜してくるよ。」

吐き捨てるように言うと、縁が慌てて俺を押し止めようとする。
今更、何だっと言うんだよ。

俺が話についていけないの、わかってるんだろ？
足手纏いにはなりたくないのに、何でわかってくれないんだよ。

「待ってよ、要^{かなめ}！もう少し待ってから、行動しよう？」

「縁の言うとおりでぞ。まだ捜査は始まったばかりだからさ？
先達^{センダツ}も言ったものだ、急がば回れ、とな。」

焰も俺を止めようとしているが、もう俺には関係無い。

「縁と焰は、じっくり考えてから動きなよ。俺は、じっとしてられない性分だからさ。」

そう言うと、縁は一瞬躊躇う様な仕草を見せたが、俺の考えを認めてくれたように、俺を止めなくなった。
でも、まだ付き合いの浅い焰には、俺の考えは認めてもらえないらしい。

「捜査は、そう簡単に進むもんじゃないんだよ。あと少し待とう？」

「俺、もう決めたから。男に二言はなし、だろ？」

そして、俺は2人の前から姿を消した。

FILE: TWO (後書き)

誤字・脱字等があれば、御報告して頂けると幸いです。

FILE..THREE

俺一人で捜す、とか自分で言ってきたものの・・・正直、何処から捜せばいいかとか全然わからない。

今更になって、俺は気付いた。

確かに、こんなに大きな世界の中で、一体どうやって放火犯を捕まえようというのだろうか？

すでに、海外に高飛びした可能性だってある。

一体、どうやって調べればいいんだ？

「どうかしたんですか？」

不意に、声をかけられた。

「あ、貴女は・・・」

「あら、私の事知っているの？」

知っているも何も、ニュースのアナウンサーをやっているのだから、

知らない人の方が少ないはずだ。

「え、と。初めまして。貴女は、アナウンサーの日比野ひのさんですよ
ね？」

「ええ、そうよ。私も貴方の事は知ってるわ。朝霧事件の生き残りの要かなめくんでしょう？」

生き残り、その言葉は俺が最も聞きたくない言葉だった。

両親の言う事に逆らい、縁よすがと共に一緒に逃げなければ、きっと・・・

いや、絶対皆助かったはずだ。

俺が・・・俺が無力だったせいで、死んだんだ。

そう、それこそが真実。

だから、今度こそは力をつけて、敵を討つんだ————！！

「覚えていてくれたんですか？」

俺なんかの事を覚えていたのは以外だ。

ただの放火事件の被害者というだけなのに。

「ええ、もちろん。だって今、貴方達は放火犯を血眼チマナコで捜してるって聞いたのよ。」

「はい。でも、全然有力な情報が無くって、捜査が難航してるんです。」

「そうなの……。」

日比野は、少し考えるような仕草をして、付け加えた。

「あの、ね。多くの人には知られてないんだけど、実はすごい掲示板があるの。そこはね、参加するのに制限があるらしいんだけど、もしそこには入れたらきっと何か掴める筈よ。」

そこで情報が手に入る。

俺にも、何か出来る事がある気がした。

「あの、その掲示板の名前、俺に教えてくれませんか？」

「わかったわ。でも私、その掲示板の異称しか知らないんだけど、それでもいいかしら？」

「はい、お願いします！」

とにかく、今は情報が欲しかった。
だから、俺はその掲示板がどんなものであれ、必ず入ってみせると心に決めていた。

FILE::THREE (後書き)

誤字・脱字等が御座いましたら御報告して頂けると幸いです。

FILE:FOUR

日比野^{ひよの}と別れてから、俺は再び捜査本部に戻った。

が、部屋の中には誰もおらず、どこかに出かけているようだった。ま、何も言われただけマシか。

そう思うと、俺は早速掲示板を探し始めた。

「えっと・・・あ、あった。これか？」

普段パソコンを使わないせいで、予想以上にその掲示板を捜すのに時間がかかった。

「D・T・・・ドウツペルガンガー・・・タグ？なんだ、これ。」

多分ここで間違いないのだが、俺は妙に胸騒ぎがした。

だけど、ここで止めたら犯人は見つからないかもしれない。

そう思うと、俺は躊躇う必要など何処にも無いのではないかと、不意にそう感じた。

そして、俺は意を決してD・Tに入った。

「あれ？なんだ、すんなりは入れるんじゃないか。・・・名前を決めてください？」

名前、名前・・・要^{かなめ}じゃ、駄目だよな。要・・・西・・・ウエスト
でいつか。

規約は・・・同意するにしとけばいいか。

『ようこそ、D・T・へ。ここでは、貴方の願いを叶える為に、多くの者たちが貴方に助言してくれるでしょう。』

へえ・・・つまりここは情報提供してくれる掲示板ってわけか。
さっさと情報収集していくか。

T i t l e 朝霧事件

N a m e ウェスト

T e x t

初めまして。

ここにきたばかりの新参者なのですが、
質問します。

此処に朝霧事件の事を、
知っている方はいますか？

暫らくすると、他の誰かから返信が来た。

N a m e 野原

T e x t

初めまして、ウェストさん。

まず、質問にお答えする前に、

貴方はここの規約に目を通しましたか？

まだ読んでないのなら早く読むべきです。

これは、私の忠告ですから、

別に読まなくてもいいんですけどね。

では、質問にお答えしましょう。

ここには、3人の関係者がいます。

知っている、という人々なら

ここにいる過半数を占めるでしょう。

FILE..FOUR(後書き)

誤字・脱字などがありましたら、御報告して頂けると幸いです。

FILE..FIVE

・・・関係者、つまり事件に関わった者が、ここに集まってるのか。
しかし、規約とは初めにあったものの事だろうか？
忠告・・・一応聞いておくべきだと思い、俺は規約を読み始めた。

規約

このD・T・の管理人は、ダブル。

初めに言っておこう、浅はかな他者に憧れなど持つ者は今すぐ去れ。
そのような者に、ここで生きる資格は無い。

参加資格は、他者に憧れを抱く者だ。

ルールを教えよう。

1. この文章を読んだ時点で、お前の余命は1ヶ月となった。
2. この1ヶ月以内なら、何度でもお前の憧れる人間になれる。
※ただし、お前が実際に見たことのある人間だけだな。
3. お前たちの腕には、今この掲示板に参加している者の数が出る。
4. 1ヶ月で死にたくないのなら、

腕に出ている参加者のうちの1人、

又はお前の憧れる人間、つまりお前のコピーした本体を殺せ。

そうすれば、お前の余命は再びお前のものとなろう。

ついでに、期限がくれば、お前の姿は消滅する。

なんだって・・・？

これは、規約、というよりも紙の予告状じゃないか。

それに、俺の寿命は着実に縮まってきている、ということか？
生き延びたければ、人殺しになれば・・・？

「・・・ざけるなよ。こんなの、絶対おかしい！」

そう、呟いた時だった。

ガチャリ、と背後でドアが開く音がした。

「誰だっ!？」

そう叫んで振り返って見ると、そこには唾然とした顔で俺を見つめている2人がいた。

「縁^{よすが}・・・に、焰^{ほむら}・・・？」

俺が呟くと、2人はどうしたんだと言わんばかりに、俺をまじまじ

と見つめてくる。

そして、暫らくすると、縁は思い出したように言った。

「おかえり。」

たったそれ一言なのに、俺の視界はぐにやりと歪んで、何かが頬を伝って流れ落ちた。

その何かは、俺の恐怖心や不安を一気に拭い去ってくれた。

「うん、ただいま、縁。」

「しかし、今まで何処ほつつき歩いてたんだ？」

「あ、そうだよ。何も手掛かりなんて、見つからなかったでしょ？」

本来ならば、そこで悔しい思いをする筈だったんだが、今はそれどころじゃなくて。

「あのさ、俺あと一ヶ月したら死ぬらしい。」

「「はあ?!」」

二人の素っ頓狂な声スットンキョウを聞いて、やっぱり普通はこの反応なんだなあ、
などとぼんやり思ったりして、今までの経緯を話した。

FILE..FIVE (後書き)

誤字・脱字等があれば、御報告して頂けると幸いです。

FILE::SIX

「じゃあさ・・・その・・・D・T・って奴に参加したせいで要は^{かなめ}死ぬの？」

聞きづらそうに縁^{よすが}が聞いてきた。
でも、焰^{ほむら}は俺が話した話を本気にしてない感じた。

「だがな、実際そんなんで死ぬような奴がいれば、この世の中どうなるんだよ。死人だらけで、刑事や警察なんかは日々東奔西走^{トウホンセイソウ}しなけりゃいけないじゃないか。」

「まあ、そうなんだけどさ。でも、ちょっと見ててよ？」

俺は、焰をイメージし始めた。
焰・・・焰・・・焰・・・。
暫らくすると、俺の中で何かが変わった気がした。

「え・・・？か、要っ！」

縁が驚いて、俺を揺さぶる。

俺は近くにあった鏡で、自分を見た。

あ、焰に慣れてるじゃんか。

「どうよ？これで俺の言った事信じてもらえるだろ？」

「あ、ああ。」

焰は、これを見てもまだ信じていないようだったが、渋々頷いた。

「俺、今から捜してくるから。」

「え？どうやって？」

縁が、咄嗟に聞いてきた。

それはそうだろう、未だに何一つ解っていないのに、犯人を見つけに行くなんて、馬鹿馬鹿しいにも程がある。
だが、それはD・T・を知らない奴だけのことであって、俺や、他の参加者だったら犯人を見つける事ができる。

「あのさ、俺はさっきの話で言ってたよな？ 『実際に相手を見たことがあれば、どんな奴にだってなれる』って。」

あ、と2人は気付いたらしい。
さすがだね。

俺なんか、その方法を思いつくまで結構時間がかかったというのに。

「そういうことだから。まだ犯人が近くにいるなら、俺が一人で走り回ったほうが早いだろう？」

「そ、そうだけど・・・無理はしないでよ？」

心配そうに縁が声をかけてくれたが、今無理しないでいつ無理しろって言うんだ。

俺の命は、あと1ヶ月も無いというのに。

「ああ、わかってるよ。」

縁を適当にあしらうと、俺は部屋を出て行こうとした。
が、焰の腕によって遮られた。

「相手を見つけるのに、夜は不適だ。明るい方が視野も広くて見つけやすいだろ？今日は休んで、明日に体力温存しとけ。」

焰も人のことを多少は気にかけてるんだな、そう思ったのも、つかの間で。
次の一言で、その思いは消えうせた。

「馬鹿の考えには、欠点があるかもしれないからな。」

FILE..SIX (後書き)

誤字・脱字等があれば御報告して頂けると幸いです。

FILE..SEVEN

翌朝、珍しく2人より早く目が覚めた。
まさか怖気づいてる?・・・そんなはずないよな。
今更引けないってわかってるんだから。
そして、俺は再びD・T・を見に行った。
昨日の文章に、誰かがまた返信していた。

N a m e 太陽
T e x t

関係者をどうするつもりなの?

どうするって言われても捕まえに行くに決まってるんだろ。
俺はその為にここまで来たんだから。

N a m e ウェスト
T e x t

片っ端から追います。
この中に有力な情報を持っている人がいるらしいので。

投稿してすぐに、また誰かが返信してきた。

・・・にしても、こいつら返信が異様に早くないか？
俺の行動を監視している？

馬鹿馬鹿しい・・・そんなわけ、無いのにな。
ちよつと気にしすぎなんだろうな。

N a m e c h a s e r

T e x t

そうか。

それは楽しみだ。

じゃあ、君に助言してあげよう。

お前の追っている者はここにいる。

まあ、見つけるのは不可能だと思うがな。

不可能？まだやってみないと、わかんないだろ。

まあ、いいや。

俺の追う奴は、朝霧事件の犯人だ。

つまり、ここに犯人がいる。

犯人がこの中のどこかにいるとわかれれば、後はここで犯人の居場所
を突き止めるだけ。

今の俺は、自分の死と引き換えに力を得たんだからきつと大丈夫だ。
そう思っていると、不意に後ろから声をかけられた。

「要^{かなめ}何してんの？犯人捜しに行くんでしょ？」

「あ、ああ。今、行く。」

いつの間にか、縁と焰よすが ほむらは互いに犯人を見つけに行く場所に目星を立てていた。

けれど、俺はまだ何処から行くかは決めてなくて……。

「このあたりで一番人通りの多い所って何処だっけ？」

などと、今更ながらの質問をした。

けれども、2人はこれといって落胆した様でもなく、別々の答えが返してきた。

「やっぱり商店街じゃない？いつも人がいっぱいいるし。」

「いや、駅の方かもしれないぞ。人の出入りが盛んだからな。」

どっちの方が見つかりやすいんだろう？

いや、待てよ。

犯人が、遠くに逃げないなら、商店街の方がいいだろう。

でも万が一、犯人が逃げ遅れていたなら、駅の方が遭遇しやすい。

「確かに犯人に逃げられる可能性が、無いわけじゃないから今日は駅に行ってみた方がいいんじゃない？」

縁がそう言うなら、と俺は賛成した。

さあ、今からは俺と事件関係者での鬼ごっこだ。

俺が鬼で、事件関係者は人だ。

制限時間は1ヶ月、俺は犯人か、犯人の情報を持っている奴を見つける事ができるのだろうか？

FILE..SEVEN (後書き)

誤字・脱字等があれば御報告して頂けると幸いです。

FILE..EIGHT

とりあえず駅に行った俺は、人混みに流されていた。

「うわっ！・・・っと。」

誰かが俺の腕を掴んだ。
まさか・・・犯人が俺を――！！

「おい、大丈夫か？」

振り返ると、焰ほむらが呆れながら俺を見下ろしていた。
そして、少し離れた所で縁よすがも俺を見ていた。
なんだ、焰か。

一瞬、俺は犯人に殺されるかと思っていた。
何故だ？

俺は、俺はやっと力を手に入れたというのに・・・。

「おい、聞いてんのか？」

「あ、うん。大丈夫、ありがとう。」

それに、俺にはこいつらがいる。

いざとなれば、2人が助けてくれるはずなのに・・・そう、今のよう
うに。

「つたく、これじゃお前一人には任せられないな」

「待てよ！俺一人で大丈夫だって！」

「また一人で突っ走って人混みに流される事が、か？」

まだ言うか、とでも言うかのように俺を見てくる。

「・・・わかったよ。でも、それならどうするんだ？」

俺が渋々納得すると、焰は少し考え込んでから俺に言った。

「縁と一緒に行動しろ。」

「は？だって縁だって見る所が・・・」

そう言いかけたとき、縁がいつの間にか俺達の所まで来て言った。

「別にいいよ？要^{かなめ}が何か起こしたら大変だし」

「おい、縁！お前、俺がまるでトラブルメーカーみたいじゃないか
！」

「え？違ったの？」

再び言い返そうとしたとき、焰が口を挟んできた。

「兄弟喧嘩も程々にしとけ。早く犯人捕まえるんだろ？こうしてる間にも、犯人は動いてんだからな。」

俺たちが渋々頷くと、よし、と言って焰はどこかへ向かった。

「あれ・・・？なあ、縁。焰はどこ行くんだ？」

「俺たちの家だった場所に行ったんだ。」

そう言われて、あるフレーズが頭に浮かんだ。
犯人は現場に戻る。

「ああ！そうか。おい、縁！俺たちも行くぞ！」

縁が溜め息をついた。

「あのさ、何で焰さんが、俺たちをここに残したと思う？」

「犯人を見つけるためだろ。」

「そう、要はそうなんだけど。俺は違うんだ。要が無茶しないようになってね。」

・・・むかつく。

「ただ俺が役立たずだと思ってんだ、あいつ。だが、これ以上縁に歯向かって無駄だと思って、俺は話題をそらした。」

「そういえば、お前どこ行くつもりだったんだ？」

「焰さんと一緒に俺たちの家だった場所。」

「何で！お前は行ってよくて、俺が行ったらいけないなんて・・・俺が行くと、何かあるのか？」

縁は笑いながら、俺に言った。

「別に、要が行ったらいけないってわけじゃないよ。」

「じゃあ、行ってもいいだろ！？」

今度は溜め息をついた。

「俺たちがここを離れたら、誰がここを見るんだ？要は俺たちの切り札なんだよ。」

FILE..EIGHT（後書き）

誤字、脱字等があれば、御報告して頂けると幸いです。

FILE:NINE

こんな俺が、切り札？

俺は、役立たずで、トラブルメーカーで、意気地なしなのに。

自分で思ってた悲しくなるような、こんな俺が、切り札なのか？

「・・・そっか。なら、早く行こうぜ！」

そう言って、俺は再び人混みの中に紛れていった。

「とにかく、出来るだけ多くの人を見るんだ。」

自分自身を叱咤して、多くの人を見ていった。

そうしていると、不意に誰かに思いっきりぶつかってしまった。

「痛っ！・・・あ、えっと・・・す、すみません」

慌てて俺はそのぶつかった人に謝った。

その人は、少し不思議な人だった。

眼鏡をかけた、狡猾コウカツそうな印象の男だった。

眼鏡の奥から、俺を興味深げに見つめている気がした。

気味が悪くて、思わず後退りしてしまった。

「いや、こっちも少し考え事をしているね、すまない。」

そして、その男は足早に行ってしまった。

それと同時に、縁よすがが俺の元にやってきた。

「要かなめ、大丈夫!？」

縁の息が、少し荒い。

また俺が人混みに流されたのを見て、心配して走ってきたんだろう。いつもの俺なら、そこで余計なお世話だ、とか軽口を叩くか、一応感謝するんだけど、今はそれどころではなかった。

「あ、うん。縁、ちょっと外の空気吸ってきて良い？」

縁が心配そうに俺の顔を覗き込んだ。

「ちょっと顔色が悪いね。早く行ってきなよ。」

「ごめん。」

そう言うのと、俺は何かから逃げるように駅の外に向かった。

FILE:NINE(後書き)

誤字・脱字等があれば、御報告して頂けると幸いです。

FILE..TEN

駅を出ると、人通りの少ない脇道に入った。

「どうしよう・・・？」

口に出してしまおうと同時に、俺は今まであった不安がさらに大きくなっていく気がした。

俺は、わかってしまった。

論理なんて関係無い。

直感的に、そう感じたんだ。

「なら、捕まえるしかない、か。でもまさか、初日に見つけちゃうなんて、な」

苦笑いしてしまうほか無い。

こんなに早く見つかるなら、もっと早く行動を起こせばよかった。
・・・ちよつと待てよ？

俺、あの男にぶつかったけど・・・あいつどこに行った？

「くっそ・・・！」

慌てて駅に戻る。

駅で、縁は人間観察らしきものをしていた。

「おい、縁。俺がさっきぶつかった男がどこに行ったか知らないか？」

「え？誰かにぶつかったの？全く要^{かなめ}ってば、しっかり前見て歩いてよね？」

「今はそんな事言ってる場合じゃないんだよ！お前は見てないんだな？」

俺が凄い陰相で捲くし立てると、縁は驚きと戸惑いの表情で、首を横に振った。

「そうか。くそっ！・・・どこ行きやがった。」

一人呟くと同時に、俺は再び駆け出した。

どこだ？どこにいるんだ？

その男を捜すことに一心になって、俺は気付いた。

男は、近くにいる。

これもまた、直感的なものだった。

「こっちか・・・！」

俺は、大きなビルがたくさんある場所に来ていた。

あたりを見渡せば、その中の1つのビルの中に男は入って行った。

俺もそのビルに入っていこうとしたが、俺は名前を呼ばれた。

「要ー！もう、少し待ってよ！」

はぁ、と息を吐いて、1度深く深呼吸をすると、縁は俺にいつものように小言を言い始めた。

「いったい何があったって言うの？急に帰ってきたかと思えば、自分にぶつかった男を知らないか？って。知るわけないでしょ。俺は、要が突っ走って、人混みに流されていくのを見たから追いかけただけ。やっと見つけたかと思えば、外の空気吸うとか言って駅を出て行くし。顔色を窺えば、病的なくらいに真っ青になってるし。ここまで要を追うのがどれだけ大変だったと思ってるの？途中で何回見失いかけたと思ってるの？俺が、どれほど心配したと思ってるの？要に何かあったらどうしようって、俺がどれだけ不安になったかわかってる？大切な、たった1人の家族をまた失うかもしれないって思ったんだから。」

そう言われて、初めて気付いた。
不安なのは俺だけじゃなくて、家族を失いたくないって思ってるのは、俺だけじゃないんだって。
縁も、不安だったんだ。

「大丈夫だよ。これ以上俺たちが失うものなんて、何も無いんだ。」

俺は、縁を安心させるために言ったつもりだったけど、何故か、自分に大丈夫だって、これ以上怯える必要は無いって言った気がした。

「なんだよ、要のくせに偉そうに。」

恥ずかしそうに、縁は笑った。

言うしかない。

黙ってた所で、何も変わる事は無いんだから。

失う事が怖いなら、俺たち2人で立ち向かえば何とかなるかもしれない。

いや、何とかするんだ。

FILE..TEN(後書き)

誤字・脱字等があれば、御報告して頂けると幸いです。

FILE..ELEVEN

俺は、そのぶつかった男が犯人である事を話した。

「でもさ、要^{かなめ}はどうしてその男の人が犯人だって言えるんだよ？」

つまり、縁^{よすが}はその男が犯人ではないと思うようで、俺にはその事に反論する事はできなかった。

「でも、わかったんだ。絶対あの男だ。調べてみれば、絶対何かわかるはずだ。」

「そう、だけどさ・・・。」

縁は腑に落ちない、といった表情を隠せずにいた。
何で、わかってくれないんだ。
縁だってきつと、D・T・に入ってたら・・・。
D・T・に・・・？

「そうか！きつと・・・あの男もD・T.の参加者だ。」

「なんで？腕にあったの？数字？」

「見てないけど・・・絶対ある！」

「また、直感？」

もうウンザリだ、とでも言いたげに俺を見てくる。

「そうだよ。だけど、あの男が俺を興味深げに見ていた、とも言ったよな？」

確かめるように、俺は聞く。

「うん。眼鏡をかけた男だったんでしょ？」

「ああ、そうだ。そんな初対面の男が、ごく普通のありきたりな少年を興味深く見るか？」

縁は少し唸ってから、俺に言った。

「もしかしてさ、スリに遭ったとか思ったんじゃないの？」

馬鹿にしたように言われて、腹が立つが、ここは我慢だ。
ここで言い返しては、話が進まない。
そう思いなおして、俺は話を続けた。

「そうじゃない。もし、あの男がD・T.の参加者で、コピーした人間を殺すつもりが無かったとしたらどうする？」

「死ぬつもりか、あるいは……。」

言いかけて、縁ははつとした表情で俺を見た。
流石は、縁だ。
理解が早くて助かる。

「そう、参加者の1人を殺すしかない。だから、きっとあの男は俺が殺せるかどうかを、見ていたんじゃないかと思う。」

「そっか。確かに、参加者には老若男女様々だから、出来るだけ簡単に殺せる子供の方が良いからね。だって、参加者を殺すのはコピーした人間を殺すよりも危険だし、逆に殺されてしまう可能性もあるからね。」

納得した、という表情で俺を見ていたが、不意に俺に聞いてきた。

「じゃあさ、早速その男を調査したいんだけど、要はどうするの？」

FILE..ELEVEN(後書き)

誤字・脱字等がありましたら、御報告して頂けると幸いです。

FILE..TWELVE

何で縁よすががそんな当たり前の事を聞いてくるのか、俺にはわからなかった。

「何が？俺が今更になって、調査しないとも言いたいのか？」

縁は慌てて首を振った。

「そんなことじゃないよ！ただ、要かなめが危険になるんじゃないのかなって思ったんだよ。」

「だから何でだよ？お前だって十分危険になるじゃないか。」

「だから、そうじゃなくて！要はD・Tの参加者でしょ？だから、殺される可能性だってあるし、要は一度犯人に目撃された事もあるんだよ？捜査に不利だから、どうするのかって聞いたんだよ。」

縁は縁なりに俺の事を考えてくれていた。
今までなら、その言葉に甘えて辞退するだろう。
でも、今の俺は違うんだ。

「俺だけ、安全な所に行って待ってろってか？冗談じゃない。俺は、父さんと、母さんと、香織の仇を討たないといけないんだ。」

「仇なら、俺が討つ。だから、要は安心してその男が逮捕されるのを、待ってていいんだよ。もうこれ以上失うものなんて、何も無いんだろ？」

「そう、だけど！俺は絶対死なない！そう誓う！だから、俺も捕まえたいんだ。お前だけに任せてたらいけないんだよ。昔のままで、いたくないんだ。これ以上、逃げたくないんだ！」

俺の思いは縁にもきっと伝わったはずだ。

あの、悲惨な朝に、2人で家族を見捨てたんだ。

そして、俺たちは霧の中を2人で一緒に逃げたのだから。

まだ、あの時は無力だったんだ。

仕方なかったんだ。

——— 無力だったから逃げたんだ！

でも今は、力を得た。

他人には無い、未知の力を。

もう、あの時のような無力な人間じゃないんだ。
だから、これだけは俺も片付けないといけない。
俺自身と、向き合う為に。

FILE:TWELVE (後書き)

誤字・脱字等がありましたら、御報告して頂けると幸いです。

FILE..THIRTEEN

あの後、俺たちは無言で駅を見つめていた。

駅の中を行き交う人々の足音が小うるさく響いていたのに、俺たちの周りだけ、無音の空間を展開しているようだった。

そのくらい空気が張り詰めていた。

そんな中で長い、長い永遠のような時を感じていると、いつの間にか日が暮れようとしていた。

そして、夕暮れ時になると、焰が俺たちを迎えに来た。

「何か収穫はあったか？」

意気揚々と聞いてくる焰に俺は少し、苛立ちを感じていた。

空気が読めてない、と言うよりは、俺自身の子供っぽい考えに、だ。焰はズルイ。俺達は大切なものを失ってきたと言うのに、何も失ってない。

それに、この事だって仕事だから仕方なくやっていて、本当はどこか面倒くさく感じていて、別に犯人を捕まらなくても良いんじゃないかって考えてるんじゃないかって。

でも、今日はついに犯人を見つけることが出来たんだ。だから、自慢げに言っても良いんだよね？

「聞いて驚くなよ、焰？ ついに犯人を見つけたんだ！」

焰は目を見開いた。

まるで、そんなはずが無い、とでも言うように。

焰が否定しようと口を開いた時、縁が俺をフォローした。

「いや、これは多分あつて。俺も、そんな気がするから大丈夫だと思います。」

縁がそう言うなら、と焰は渋々認めてくれた。

「で、そいつは今どこに？」

・・・長い沈黙の後、俺は静かに口を開いた。

「そういや、あの男、まだあのビルの中いるのか？」

「・・・そうだといいいけど。普通、仕事って言っても、そんなに長
くいる？」

その質問に、俺は歯切れの悪い返事をした。

「普通はいない、よな。」

焰が深く溜め息をついた。

「お前らなあ・・・。縁もいたのに、いったい何やってんだよ。縁、
^{かなめ}要に汚染されてきてないか？」

「あ、そうかもしれませんね。1日中一緒にいると、要の馬鹿が空
気感染してた気がします。」

空気感染って・・・なんて失礼な奴なんだ。
しかも、しっかりと俺が馬鹿だって言ってるし。

「俺も、縁の生真面目さが移ってたかも。」

「今更、言うのかよ。まあ、縁の生真面目さが移るのは悪くないが、縁は可哀想だな、こんな奴の馬鹿が移って。」

「何だ、それ！まるで、俺が悪い菌みたいじゃないか！」

拗ねて言ってみると、2人は笑った。

なんだか、あの張り詰めた空気から、少しはいつもの雰囲気に戻った気がした。

そして、俺たちはいつもみたいなくだらぬ話をしながら帰った。

FILE..THIRTEEN (後書き)

誤字・脱字等がありましたら、御報告して頂けると幸いです。

FILE::FOURTEEN

いかにも事務とかで使われそうな、長机が2つと、パイプ椅子が3つ置いてある部屋の片隅にある1台のパソコンで、俺は1人D・T.を見に行っていた。
そして、そこには新しい記事があった。

Title 小さな探偵達

Name chaser

Text

最近は小さな探偵達が、うろついてるな。
見えて面白い。

少年探偵団にも満たない、小さな探偵達。

笑ったり、怒ったり、悲しんだり、

キドアイラク
喜怒哀楽の激しい

忙しい奴らだ。

平和ボケも困った者だな。

小さな探偵たち・・・複数形って事は、俺と縁よすがの事か？

でも、何で俺達が探してるって事がわかるんだよ！

やっぱり、こいつら俺を監視してるんじゃないか？

いや、今まででも結構勘違いがあったんだ。

これもその1つだろ、きつと。

そして、その記事に返してる人がいた。

N a m e 太陽

T e x t

そうね。

この国は平和すぎる。

でも、その探偵さんたちは何を捜してたのかしら？

1度見てみたいな、その小さな探偵さんたちを。

どうしよう。

chaserって奴は、俺が何を調べてるってのは、わかってる。
でも、ここは一か八か、俺も賭けに出るしかないのか？

N a m e ウェスト

T e x t

俺も見てみたいですな。

その小さな探偵たちを。

捜しものが見つかればいいですな。

よし。

こうすれば、誰も俺がこの小さな探偵たちの1人が、俺だとは思わないはずだ。

そして、俺はパソコンの電源を落とした。

「縁たちにも、一応この事は知らせないとな。」

そう呟いて、俺は部屋を出て、縁たちのいる場所に向かった。

FILE: FOURTEEN (後書き)

誤字・脱字等がありましたら、御報告して頂けると幸いです。

FILE..FIFTEEN

「じゃあ、今から昨日の収穫について話し合うか。」

落ち着いた声で焰^{ほむら}が言う。

昨日の収穫。

それが、あの男についてだってことくらい俺にだって良くわかった。

「まずは、要^{かなめ}と縁^{よすが}からいいぜ。」

挑戦的な声で、焰は俺たちに言った。

俺と縁は目配せをして、縁が口を開く。

「俺たちは、犯人を見つけたんだ。その男は、昨日要と接触した。」

縁が、ここからはお前が言え、とでも言うかのように、俺を見る。
俺は縁に続ける。

「駅でぶつかっただ。あいつは、俺を観察するような目で見てきて、すぐに人混みに紛れてたんだ。」

そう言うと、焰が慌てて聞いてきた。

「じゃ、じゃあお前らはそこで犯人を見失っちゃったのか？」

それを聞いて、縁が笑う。

「違いますよ。見逃したのはもっと先の事です。要、続きを言って。」

「俺はその男を再び捜し出して、尾行したんだ。あいつは、ビルの中に入っていったんだ。それを追いかけて行こうとしたら、縁に邪魔された。」

そう言うと、縁は頬を膨らませた。

「だって、あれは要が悪いんだよ！勝手に単独行動するから・・・」

縁の声が、だんだん小さくなっていく。

縁は、どうにかして責任^{セキンノガ}遁れをしようと、足掻^{アガ}いているようだ。

縁のそう言うところが、生真面目なんだよな。

「まあ、だけど。あいつは出てこなかったんだ。暫らく駅の中で見張ってたけど、帰ってこなかった。でも、あいつが犯人だってのは間違いないから。それと、あいつはD・T・の参加者だ、多分。」

D・T・の参加者だと聞いた時、焰は一瞬目を見開いた。

やっぱり、こんなに近くに俺と同じような参加者がいるとは、思わなかったのだろう。

けれど、その考えは俺の思いこみだった。

そう、焰は俺達の何倍も鋭い奴だから。

「ならば、その男はお前を狙ってるんじゃないか？お前が参加者なら、殺される理由だって明白じゃないか。それに、コピーした人間

を殺すのよりリスクが低いからな。それに、お前なら狙われてもおかしくない。」

FILE..FIFTEEN (後書き)

誤字・脱字等がありましたら、御報告して頂けると幸いです。

FILE..SIXTEEN

俺は耳を疑った。

狙われても、おかしくない？

何でだ？

俺はその男に恨まれる事や、殺されるような事をした事があったのか？

縁も、その理由がわからなかったようで、俺より先に焰ほむちりに尋ねた。

「あの、なんでそこで要かなめが狙われてもおかしくないんですか？」

焰は俺たちを一瞥イチベツすると、説明し始めた。

「少し時を遡サカノボるが、お前たちの家は放火に遭った。その犯人が、その男だとなると、だ。お前たちは生き残り。もしかしたら、犯人は自分の顔を見られたかもしれないんだ。それは焦り、戸惑うだろう？」

焰は、俺、縁の順に視線を合わせる。

その仕草は、まるでここまでは理解できるよな、と確認するように。俺たちは頷いた。

それを見て、焰は続ける。

「ならば、だ。犯人はどうすると思う？」

縁はすぐに答える。

「口封じをする？・・・あ。」

縁は何かに気付いたようだ。

残念ながら、馬鹿な俺は未だに事態を飲み込めてない。
そんな俺を見て、焰は苦笑して言った。

「口封じをするなら、例えばお前は どうする？脅したって人間いつかは口が滑るよな？」

俺は再び頷く。

誰だって拷問などを受けていたら、いつかは口が滑るはず。
だったら、どうしたら絶対に喋らせなく出来る？

あ、わかった。
簡単な事じゃないか。

「もう気付いたよな？口封じの為に、殺すのが一番だ。何も痕跡コンセキを残さなければ、事件は迷宮入り、はいお終い。って感じだもんな？」

俺たちは頷く。

そこで、俺の脳内に1つの疑問が浮かんた。

「でも、それなら俺だけじゃなく縁も狙われるはずだろ？」

そう言われると、焰は少し唸ってから言う。

「だって、縁はD・T.にはいないだろ？わざわざコピーしてまではしないだろ？」

「それは、そうだけど・・・。」

俺は、なんだか少し納得いかなくて、真っ黒な重い塊の様なものが心の奥底で渦巻いていた。

FILE..SIXTEEN(後書き)

誤字・脱字等があれば、御報告して頂けると幸いです。

FILE..SEVENTEEN

俺の氣にくわない、という表情に氣がつかなかったのか、焰^{ほむら}は話を先に進め始めた。

「じゃあ、俺の収穫について、か。」

深く深呼吸をしてから、俺と縁^{よすが}を見る。

これから一体どんな事を言うんだ？

もう俺たちが犯人を言ったんだから、どうせ些細な事しか見つからなかったはずなのに。

「俺は、あの事件の犯人候補を割り出したんだ。」

犯人を？

でも、一体どうやって？

今まで全然見つからなかったと言うのに・・・。

俺の心の中を代弁するかのように、縁が焰に問う。

「何で今更わかったんですか?!」

縁の声は少し、刺々しさを含んでいた。

俺だってそうだ。

本当は、初めから本気で探せば見つかったんじゃないのかって。

焰は、縁の瞳をじっと見つめている。

「今更・・・要^{かなめ}の命が危険に晒した後で！」

それは、焰を皮肉っているようにも聞こえた。

それでも、焰は縁の瞳を真剣に見つめている。

そう、この視線。

この視線が、俺を惹きつけたんだ。

相手の心の奥底を覗いて、その真理を問いただすような、強い視線に。

熱い、焰の様な視線に。

縁は、きっと知らなかったんだろう。

事件を解き明かす為になら、多少の事には動じない強い意志を。

俺は、縁の顔を見ると、縁は少し戸惑うような仕草を見せた。

焰に根負けした、そんな感じだった。

「もういいんだ、縁。で?それは何人くらいいるんだ?」

とりあえず、俺はこの陰鬱な雰囲気を払拭する為に言ったが、それが今一番大事な事だ。

数が少なければ少ないほど捜し出し易いが、その中に真犯人がいなければ振り出しに戻らなければならない。

まさに、一攫千金の賭けだ。

「多くて、3人だが、とりあえず俺は1人に絞ってみた。」

FILE..SEVENTEEN (後書き)

誤字・脱字等がありましたら、御報告していただけると幸いです。

FILE..EIGHTEEN

3人か。

少ない、といえ少ないが、1人に絞れた、だと？
誰だ？

いつ、それよりも一体どうやって見極めたんだ？

「それって誰と、誰と、誰なんだ？」

俺がそう尋ねると、焰ほむらは答え始めた。

「まずは、1人目だ。お前たちの家の近所に公園があったら？そこにフリーターがいたらいいんだ。煙草を吸ってたから、発火の原因がそれかもしれないって散歩中の人からだ。」

「でもさ、煙草が原因なら通行人の可能性だって拭えないだろ？」

公園で煙草を吸う人なんてたくさんいる。
その時々々っていうのは、おかしいんじゃないか？

それに、そんな事を言った散歩中のの方が怪しいと思うのが普通じゃないか？

いかにも煙草を吸ってた人に濡れ衣を着せてますって感じがして・・。

「それがな、ちょうど事件の数分前に煙草を捨てて、公園から急いで出て行ったらしいんだ。そして、5分くらいして帰って来たらしい。それも、片手にライターを持ったまま。その時煙草は持ってなかったらしい。それに、その後もライターを手の中で弄ぶ^{モテアソ}だけで、タバコを吸う気配が無かった、と散歩中の人からの証言だ。」

それなら、怪しいよな。

5分程度で公園に帰ってこれる所なんて、早々遠くはないはずだから。

それなら、疑う余地は無いか。

「じゃあ、2人目は？」

仕方ないので、次の人物について尋ねる事にした。
すると、驚くべき答えが返ってきた。

「2人目は、通り魔だ。」

FILE..EIGHTEEN (後書き)

誤字・脱字等があれば、御報告していただけると幸いです。

FILE:NINETEEN

「・・・は？」

俺は耳を疑った。
通り魔だって？

なんでそんな事件とは無関係な奴が出てくるんだよ。

「だから、通り魔だ。と・お・り・ま！」

「わかってるって！だから、なんで事件とは無関係な通り魔が出てくるんだよ！」

ほむら オオゲサ
焰は大袈裟に溜め息をついた。

な、なんだよ。

まるで、俺が事態を飲み込めてない馬鹿みたいな感じじゃないか。

「通り魔がお前の家の近辺で盛んに起こってただろ？」

「そういえば・・・そんなこともあったような。」

正直、通り魔の存在事態知らなかったんだけど、今ここで知らない
とでも言ったら絶対に次は鼻で笑われる。

そう思って俺は、多少は誤魔化せたとはい思ったんだけど・・・どう
やらバレてみたいで、縁が俺に説明してくれた。

「学校の帰宅中に女子高生が1名と、男子小学生1名、OLが1名、
その見回りで徘徊ハイカイしてたおばさん1名、計4名が俺たちの家から
1km以内で起こった事件だよ。校長先生が顰シカめ面で俺たちに語っ
てただろ？」

途中から再び会話に加わって来たのにも拘カカワらず、なんて細かい分析
なんだよ。

やっぱ縁は凄いな。

俺には出来ない芸当だ。

「そう。そして、その事件のあった場所の4点を結ぶと・・・ほ
ら。綺麗な正方形の完成だ。」

焰は机の上に地図を広げて、事件のあった場所同士結んでいく。
すると、そこには見事な正方形が出来上がっていた。

FILE:NINETEEN (後書き)

誤字・脱字等がありましたら、御報告して頂けると幸いです。

FILE: TWNTY

「あれ・・・？でも、これがどう関係するんだ？この中なら、俺たちの家の他に24件もあるじゃないか。」

ほむら よすが
焰と縁が2人同時に盛大な溜め息を吐いた。

あれ？

俺、なんか変な事言ったか？

縁に助けを目で訴えてみると、縁はいかにも嫌そうな顔をして言った。

「あのね、これ正方形でしょ？」

「ああ。どこからどう見ても、立派な正方形にしか見えないな。」

「じゃあさ、これに対角線を引いてみてよ？」

対角線？

あのバツ印みたいな？

俺が悩んでいると、縁が口を挟んだ。

「正方形の向かい合う点に線引いて？」

「3本も引けるけど・・・？」

縁が深く息を吐いた。
すると、焰が口を挟んできた。

「その中で、2本は正方形と重なるが、残りの1本一番長いのが重ならないだろ。それだ、それ。それを引けばいい。残りの1本も同様にやってみろ。」

2人の呆れる視線の中で、俺は無事に対角線を引く事が出来た。

「見ろよ、縁！バツが出来た！」

俺が満面の笑顔でそう言うと、2人は顔を見合わせて苦笑した。
上手く出来たんだから、少しは褒めてくれたって良いのにな、と思
いっつも俺は縁の説明を聞く。

「出来たでしょ？で、その交点・・・バツの線が重なってる所には
何がある？」

「バツの重なってる所・・・？あ、俺たちの家だ。」

ようやくわかったか、という風に焰は地図を手に取り、俺たちの家
を指す。

「つまり、通り魔は初めからここを狙うつもりだった、とも考えら
れないか？」

「そうだな。でも、なんで俺たちの家が狙われるんだ？」

「家族の誰かが通り魔の怨念をかった、とか？」

縁がふざけたように言うと、焰はそれに真剣に答えた。

「それも予想の範疇ハンチュウだがな、次の奴が一番怪しいんだ。」

FILE:TWNTY (後書き)

誤字・脱字等がありましたら、御報告して頂けると幸いです。

FILE: TWENTY-FIRST

それから、暫らくの間沈黙が続いていた。

俺は、それに耐えられなくて無理矢理話を切り出した。

「なあ！それって一体誰なんだよ！」

家族の仇かもしれない存在の情報を目の前にして、黙ってはいられなかった。

俺は犯人の情報を喉から手が出るほどに欲していたが、今は犯人の目星が付いたんだから、別にどうでもいい事だと思っていたけど、少しでも正確な事を知りたいと心の奥底では思っていた。

早く、そいつの名前を聞き出して、俺が、俺達で捕まえに行きたかった。

「まあまあ、そう焦るな。今から話すから。」

そう、幼い子供を宥めるように言ってから、焰ほむらは語り始めた。

それは、あまりにも在り来たりで、とてもくだらない理由からだった。

「そいつは、ただのごく普通のサラリーマンだ。今その男は、お前達の父親の勤めていた会社で、お前達の父親がやっていた仕事をこなしているらしい。」

それを聞いて、何かを疑問に思ったらしい縁は焰よすがに尋ねた。

「それって・・・その男は、父さんのいた地位が欲しかったっていうわけ？」

「簡単に言うと、そう言うことだろうな。」

縁は、それを聞くと少し悔しげな顔をしていた。

俺も悔しかった。

なんでそんなに地位が欲しかったんだろう？

別に、俺達の父さんじゃなくても良かったのに。

他の奴だったら別にどうでも良かったはずなのに、と俺の中で醜い感情が渦巻いていた。

そして、話をそらすかのように焰は俺達に聞いてきた。

「お前達の父親が、どの地位だったか知ってるか？」

FILE: TWENTY-FIRST (後書き)

誤字・脱字等がありましたら、御報告して頂けると幸いです。

FILE: TWENTY-SECOND

俺はその質問に対して言葉に詰ったが、代わりに縁が^{よすが}すぐに答えた。

「係長って父さんから聞いてたけど？でも本来なら今頃課長の座に就任してるはずだった。」

「え？父さんそんな事言ってたのか？」

縁は溜め息を吐いた。

もちろん焰は^{ほむら}呆れた顔で俺を見ている。

「いつの日か忘れたけど、夕飯食べてる時に言ってたでしょ？」

「夕飯毎日食ってたから、いつの事だかわからないんだけど。」

「確か、^{かなめ}要が夏休みの補習サボった日だよ。一日中ゲームしてたか

ら、母さん怒ってたけど、父さんの昇進の話聞いた途端に機嫌が良くなっただろ？」

確かに、そんな事があったような気がする。

もう、ずっと前の事だった気がした。

あれからまだ1ヶ月も経ってないのに、もう何十年間も昔の事のよ
うに感じた。

「じゃあ、今その男は課長になってるのか？」

「要、今までの話ちゃんと聞いてた？」

2人の冷めた視線が、俺に向く。

俺は言い訳っぽい感じがしたけど、今までの話を簡単に纏めて言っ
た。

「ああ。でも、父さんと同じ仕事って事は、今は係長じゃなくて、
課長なんだろ？」

「馬鹿だな。」

「な、なんだよ、焰のくせに！」

今の説明何処か間違ってたのか？

俺としては、何とも解り易く話を纏めてたつもりだけど等と思考錯誤している、焰が修正してくれた。

「今は、課長の座は空席だ。だが、間違いなくその男がそこを狙っているはずだ。」

FILE::TWNTY-SECOND (後書き)

誤字・脱字等が御座いましたら、御報告して頂けると幸いです。

FILE: TWENTY-THIRD

あれ？

でも本来、父さんが課長になるんだったら、誰が代わりに係長になる予定だったんだ？

俺は当たり前疑問に突き立てられ、とりあえず^{ほむら}焰に尋ねてみた。

「なあ、父さんが課長になったら、誰が係長になる予定だったんだ？」

「その男だな。」

「だよな。」

でも、それなら最初からその男は係長を飛び越して、課長になってるはずじゃないか？

何か、原因があったとか？

「その犯人って何かあるのか？」

それを聞くと、焰は一瞬気まずそうな顔をした。
俺と縁は、^{よすが}それを見逃さなかった。

「やっぱり、何かあるんだよね？」

渋々、といった感じで焰は話し出した。

「お前達の父親は、^{イラユル}所謂エリート街道を歩んできていたらしいんだ。
だがな、お前達の父親は上司からの人望も厚く、部下からも凄く信
頼されていたらしい。」

「じゃあ、何で狙われたんだよ？」

そんなの、おかしいじゃないか。
その男は、父さんの部下だったのなら、恨まれたりする筈がない。
俺の考えを見越していたのか、^{よすが}縁が焰の代わりに説明した。

「嫉妬ってやつでしょ？自分よりも何だって上手く出来て、皆に一目置かれてる、そんなのを犯人は懂れてたんだよ、きつと。」

まるで、それは俺みたいな奴じゃないか。

縁が何でも出来て、それが羨ましくて。

弟のくせにって思って。

でも、俺のその気持ちはまだ懂れであって嫉妬ではない。

たった・・・たったそれだけの違いなんだ。

「で、その男ってどんな外見なんだ？」

「それが、な。ちよつと皺付いたスーツを着て、眼鏡をかけた初老の男なんだ。」

FILE: TWENTY-THIRD (後書き)

誤字・脱字等が御座いましたら、御報告お願いします。

FILE::TWENTY-FOUR

それって・・・まさか、な？

同一人物かよっ！

思わず突っ込みたくなったのを、心の中で押し止めて、よすが縁の顔色を
ウカガ窺う。

俺と同じように、縁も驚愕している。

「じゃあ、明日からはそいつを徹底的に調べるのか？」

俺がそう聞くと、縁が慌てて口を挟んできた。

「ま、待ってよ！何でその男が今更犯人候補に上がってきたんだよ
！」

ほむら焰は、苦虫を噛んだ様な顔をした。

何だ？

何かあったとも言うのか？

「それが・・・その男、危険なんだ。」

俺も縁も、わけがわからないと言った顔をした。

「どういう、こと？」

何とか言葉にした、といった感じで縁は焰に尋ねる。

「前々から、お前達の父親の会社に調べを入れてたんだ。だが、どうしてもその男の情報だけが見当たらなくてな。探しても探しても、全然見つからなかったんだ。」

「じゃあ、どうしてわかったの？」

「一人ひとりに聞き込み調査していったんだ。それがやっと終わったのが今日。そういうわけで、今更って事になっちまったんだ。」

「そっか。そういうことなら、仕方ないね。」

焰は申し訳無さそうしていた。

それを垣間見た縁は、話を切り替えるかのように明るい声で言った。

「それなら、明日からは犯人の備考調査開始だね！」

そうして、俺達の長い会議は幕を閉じた。

明日からが、本当に命懸けの勝負になっていくんだ。

俺は、いつもより緊張した面持ちで明日に臨んだ。

FILE: TWENTY-FIVE

「え？俺が、フリーター調べるの？」

俺が間の抜けた声で聞きなすと、焰^{ほむら}は予想通りの答えを返す。

「ああ。全てお前に任せるが、無茶はするなよ？」

ついに、俺も一人前と認められた気がした。

この間までは、単独行動を避けるような感じだったのに。

こんな事を言えば、どうせ縁^{よすが}はきつと「ただ単に人手不足なんですよ？」とか言うに違いない。

「一応、気をつけるよ。」

だけど、少し欲を言えばもう少し大きな奴を調べたかった。

そう、あの会社員を。

俺の思考とは無関係に、焰と縁の話は進展していた。

「じゃあ、俺は通り魔の捜査をすれば良いんだよね？」

縁の確認に、焰は簡単に返事をする。

「ああ。だが、犯人を見つけたらすぐに帰って来るか、そのまま落ち着いて捜査を続けろよ。間違えても、お前1人で捕まえに行こうとするなよ？」

そう言われると、縁は笑って返事をした。

「俺は要^{かなめ}じゃないから、そんな心配はいらないよ。見つけたら、すぐに報告するよ。それよりも、そっち大丈夫なんですか？」

そう言われて、焰は多少顔を曇らせたまま言う。

「やっぱりあいつは怪しいが、調べないわけにも行かないだろ。」

「大丈夫だって、縁！ 焰は丈夫そうだから。」

俺の根拠の無い説得に何となく頷いた縁は、早速各自で探しに行く事を提案した。

俺もフリーターの黒白を、はっきりさせに行く事にした。

FILE: TWENTY-SIX

俺は今、公園にいる。

が、公園には人っ子一人いない。

こんな寂れた公園で、よく人に出会ったもんだな、と俺は少し感心する。

折角上機嫌で此処まで来たのに、誰もいなければ意味が無いな、な
どと思いつつも俺は人探しをしていた。

「あれ・・・？」

ぼんやりしているうちに、一人の青年が入ってきた。

もしかして、あいつが例のライターか？

いや、そんなに簡単に見つかるはずない、そう思って俺は暫らく青年の行動を見ていた。

ベンチに座ってライターを手慣れた行動で取り出して、じっと見つめている。

ライター？

やっぱりこいつ・・・そう思ったときだった。

青年はベンチから立ち上がって、こちらに向かってくる。

俺何かしたか？と慌てて考え始めるが初対面なのに、心当たりがあるはずが無い。

意を決して青年と対峙した。

すると、意外なことに相手から声をかけられた。

「おい、お前学校は？」

学校、懐かしい単語だな、と悠長に俺は思った。
事件があつて以来、俺達は一度も学校に行っていなかった。
いや、行けなくなったと言う方が、正しいのだろう。

「行ってませんけど。」

「義務教育は、しっかり受けないといけないだろ。ほら、さっさと家に帰って、学校行け。」

義務、教育だと？

まさか、こいつは俺を中学生と勘違いしてる？
これだけは、訂正しないと！

「あの、俺元高校生なんですけど？」

俺としては、不機嫌なオーラを出して、厳格に見せたつもりだったが、相手には伝わらなかったようで、馬鹿にした感じに笑われた。

「元って何だ？元って。もしかしくなくても、退学か？」

馬鹿にされてる、それ以外に形容し難いものだった。
間違っただけ……。

「退学、といえば退学なんですけど。」

こいつに態々事情を話す必要があるのか？そう思ったが、何かの情報を得る手掛かりになるかもしれないと思って、俺はぼつりぼつりと話し出した。

FILE: TWENTY-SEVEN

「俺、両親がいらないんです。正確には、いなくなったって感じで・・
・。だから、今は学校に行くお金が無くて通えなくなったって事もあるんですけど、本当は人を探してます。」

その話に興味を持ったのか、質問してきた。

「もしかして、少し前にあった・・・火事で？」

火事、その単語を言うのをすこし躊躇タメラったように見えた。
そして、俺はそれを見逃さなかった。
俺は、更に事件の事を語っていく。

「父さんと母さん、そして妹を無くしました。」

俯いて、悲しそうなフリをすると、慌てて声をかけてきた。

「お、おい！そんなに落ち込むなよ。あのさ・・・それって、少し前にあった朝霧事件の？」

「ええ。そうですよ。俺は、その逃げ出した生き残りです。」

吐き捨てるように言うと、予想通り慰めてくる。
もっと巧妙な演技をしなければ、こいつは尻尾シッポを見せないと俺は確信に近いものを何故か感じていた。

焰ほむらは使ってるようには見えないけど、テレビとかで探偵が直感で推理を解いていく、そんな感覚に近いものだった。

「だから、俺は犯人を探してるんです。一刻でも早く、俺は犯人を捕まえたいんです。」

「実は俺、その犯人知ってるんだ。」

やっぱり！

俺の直感は外れてなかったんだ。

だけど、此処で演技を止めるわけにはいかなかった。

「今、犯人は何処にいるんですか？」

少し希望を持った感じに言うと、すぐに口を割ってくれた。

「そいつ、か？悪いが、それは知らないんだ。だけど、あれは一家
心中シジュウだったんだろ？」

FILE: TWENTY-EIGHT

一家心中？

一体何の事だ？

「一家、心中・・・？」

俺の言葉を聞くと、不審げに俺を見た。

「違ったのか？だってあれ、お前の家の・・・確か久ヒサ・・・なんだっけな？」

久・・・父さんの事か？

俺は、父さんの名前を言う。

「久志ひさしですか？」

「そう、そんな名前の。テレビで写真が出てたよな？」

「出て、ましたね。それで父がどうかしたんですか？」

「あ、そうそう。それで、な？」

急に声のトーンが低くなった。

「そいつが自分の家に、多分灯油か何かの透明の液体を流してたんだ。そして、マッチを落ちると、ほぼ同時に火が付いたんだ。そして、その久志って男は玄関から逃げたはずだったんだが、何故か死んでたよな？何か大切な物でも家に置き忘れたのかは知らないけど。」

父さんが？

そんな事、する筈無い！

それにしても、この男が引っかかっている通り、俺も疑問に思う。

だけど、この男が嘘をついている可能性がある。

一か八か、信じてみるか。

「じゃあ、じゃあなんで父さんは俺達を助けたんですか！」

うーん、と少し唸ってから答える。

「やっぱり、家族が大切だったんじゃないのか？なあ、一つ聞いていいか？お前は生き残りのどっちなんだ？」

どっち？

聞かれてることって、俺と縁よすがのどっちかって事か？

「俺は、兄の要かなめの方です。」

「そうか。俺は一応大学生やってる珂崎かざき 秦迹しんじだ。」

「え・・・？フリーターじゃないんですか？」

「俺がそんなに職探ししてるように見えるか？」

「あ、確かに。」

そうして、俺はフリーター・・・じゃなくて、大学生らしい珂崎から情報を得る事が出来た。

これからは、こいつを見張って、さっきの話が本当かどうか確かめなければいけないと感じつつも、俺はさっきの話が真実だと何となく感じていた。

FILE: TWENTY-NINE

俺は今日もあの公園へと向かう。

名目上はあの事の真偽を確かめるためだけど、俺はまだ珂崎^{かき}が何か隠してるように見えたから。

とりあえず、珂崎がいないか見るだけ見てみるか、という軽い気持ちで公園を見た。

「珂崎ーいないのかー？」

まずは、大声でだだっ広い公園全体に呼びかけてみた。

・・・返答なし、か。

なら地道に探すしかないのか、そう思ったときだった。
後ろから誰かに肩を小突かれた。

「ん・・・？」

振り返ると、そこには片手に鞆を携えている珂崎がいた。

「俺は迷子の犬か。あんな大声で呼ばなくても聞こえるっての。」

「あ、ごめん。」

条件反射の如く謝ってしまったが、当然の疑問に辿り着いた。
・・・俺、何で謝ってんだ？

「ちょっと待て！お前俺が呼んでるの気付いてて、返事しなかったのかよ！」

「だって面倒くさいだろ。」

「まあ、確かに・・・って！面倒くさがるなよ！」

というか俺、珂崎とくだらないボケしてる場合だったっけ？
何か目的があったような気がしないわけでもないけど・・・なんだっけ？

「あ。」

「ん？どうした？」

「いや、ちょっと・・・。」

俺が口籠るのを見て、珂崎が疑いをかけるような視線を送ってきた。別にこいつには関係ないけど、知ってるか疑問に思ったことがある。聞くだけ聞いてみることにするか。

「なあ、最近ここら辺であった通り魔事件の事で、何か知ってる事無い？」

FILE..THIRTY

俺がそう言うのと、珂崎^{かき}は苦笑して逆に俺に尋ねてきた。

「もしかして、俺の事尾行してたりする？」

バ、バレた?!

で、でも一体どこで・・・?

俺ってやつぱりここまで才能が無かったのか?

尾行すら出来ない凡庸な人間のレッテルが貼られるのは嫌だな・・・。

って違う!

こんな所で諦めてたまるか!

まずは、言い訳を考えるんだ。

最も解り難くて巧妙な嘘を。

「尾行って何だよ。俺がそんな隠し事の出来るような人間に見えるか? ま、頑張れば出来ないわけじゃないと思うけど・・・。」

自分で言ってるってどうしようもなく悲しくなるけど、此処は我慢するしかない。

珂崎は、それでも俺を疑っているようだった。

「そう、だよな。お前なんか出来るわけないもんな、そんなテクニク。」

なんか、自分で言うのはまだマシだけど、他人に言われると何でこう頭にくるかな・・・！

「や、やれば出来るんだって！何事も努力すれば出来るんだからな！」

自分で言ってて負け犬の遠吠え、というよりはありきたりな悪役の捨て台詞みたいに聞こえてくる・・・。

「で！？知ってんのか？」

こうなったら強行突破しかない。
自暴自棄とかヤケクソとも聞こえるけど。

「常識レベルくらいは、な。」

やっぱりか。

こいつは、焰ほむらが不審に思ったくらいだから、怪し過ぎるんだ。
そう、それは昨日の夜のことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0653f/>

D.T.

2010年11月6日01時55分発行